

( 続紙 1)

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |                          |    |        |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------|----|--------|
| 京都大学                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                | 博士（地域研究）                 | 氏名 | 藤岡 悠一郎 |
| 論文題目                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                | ナミビア農牧社会における社会変容と自然環境の変化 |    |        |
| <p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文では、ナミビア北部に暮らす農牧民オヴァンボと同地域に成立する人為植生を対象に、社会変容と自然環境の変化との関係性を世帯間の経済格差や自然資源利用の世帯差に注目しながら分析し、現代オヴァンボ社会で人為植生が果たす役割と人為植生の更新メカニズムについて考察した。</p> <p>第1章では先行研究を整理し、本研究の目的と調査方法を示した。</p> <p>第2章では、オヴァンボ社会の変容を、世帯間の経済格差の拡大と土地や自然資源の管理主体である「伝統的政府」の役割に注目して検討した。本地域の経済格差は植民地期の後半から顕在化し、独立後のアパルトヘイトの撤廃により、さらに拡大していた。そして、富裕世帯の出現や国家の成立のもとで、土地や自然資源をめぐる権利が「伝統的政府」と世帯とのあいだで揺れ動きつつあった。</p> <p>第3章では、オヴァンボの営む天水依存農耕と季節的な移牧による牧畜がいかに変容しつつあるか検討した。彼らの農耕と牧畜は、王国周囲のフロンティアに支えられて成立してきたが、土地の細分化や新村の形成によるフロンティアの変化のもと、富裕世帯は畑や放牧地の確保のため他村にキャトルポストを設置するなどの試みを行っていた。そのなかで、家畜所有頭数の世帯差が拡大していたが、畜産物などを世帯間で贈与しあう相互扶助関係が維持されていた。</p> <p>第4章では、オヴァンボ社会のフロンティアの動態と住民の自然資源利用の変化を検討した。1970年代まで、フロンティアは自然資源の調達場として利用されてきたが、新村の形成や植生変化により、それまでのような利用が困難になった。そのような状況に対し、オヴァンボはキャトルポストでの自然資源調達や新村の住民との社会関係を通じた自然資源の入手によって対処していた。</p> <p>第5章では、オヴァンボの樹木利用の基盤となる人為植生の構造と形成要因について、樹種構成や土壌環境、人間活動に注目して検討した。本地域の人為植生は低木層にアカシアが優占し、中・高木層にドゥームヤシとマルーラ（ウルシ科、<i>Sclerocarya birrea</i>）という在来果樹が優占する構造となっていた。その形成過程には、「伝統的政府」による在来果樹の用益権の管理と住民による樹木への選択的かつ保育的な働きかけが強く影響を及ぼしていた。</p> |                          |    |        |

第 6 章では、オヴァンボの在来果樹の利用の変化について示した。ドゥームヤシやマルーラは果実の利用のみならず、複数の部位が多様な用途に用いられていた。このような在来果樹の多重的な利用が、フロンティアの変化や村内の共用地の減少への対処として、特に非富裕世帯によって活発化していた。マルーラの果実を原料とした醸造酒は贈答品として重宝され、畜産物などの副食材料を世帯間で贈与しあう相互扶助関係を補完する働きをしていた。

第 7 章では、オヴァンボ社会の変容と住民の自然資源利用の変化が人為植生の更新に与える影響について検討した。本地域の植生は、稚樹は多いものの中間層の欠如がみられ、更新が必ずしも順調にいていなかった。その要因として、トラクタ導入による稚樹の成長抑制と樹木への保育的な働きかけの変化という点があげられた。

第 8 章では、オヴァンボ社会の変容と自然環境の変化との関係性を検討し、現代オヴァンボ社会における人為植生の役割とその更新メカニズムについて考察した。独立移行期からの農外所得の増加や経済格差の拡大、地方都市の発達やフロンティアの変化により、オヴァンボの生業様式や自然資源利用は大きく変わりつつあり、その変化には経済格差などに起因する世帯差がみられた。本地域の人為植生は近年入手しにくくなった自然資源の代替資源としての役割を強めるとともに、相互扶助関係が不安定化するなかで、マルーラ酒の利用を介して地域の社会関係を取り持つ役割を果たしていた。そして、現代のオヴァンボ社会における人為植生は、多重的な樹木利用の活発化を背景とする樹木への保育的な働きかけの実践のもとで更新され、植生全体がモザイク化する傾向にあると結論づけた。

(論文審査の結果の要旨)

アフリカの植生をめぐる生態学的研究は、自然環境(生態系)の構造や作用、そして人々の植物利用をめぐる知識や方法に関連して多くの研究蓄積を行ってきた。さらにそれらの研究成果をもとに、植生利用などの機能面にとどまらない、自然がもつ象徴的側面や精神世界とのつながりについても、文化生態学などにおいて多くの研究成果をあげてきた。

これに対し、1980年代以降、人間と環境との関係の地域性と歴史性に重きを置くポリティカル・エコロジー論の必要性が指摘され、植生の変化に対する社会変容の影響の重要性が強調されてきた。とりわけ、人々が環境資源に対する働きかけを生活の基礎とするアフリカの農村部では、環境変化はそこに住む人々の生業活動や日常生活と密接な関係にあり、人為の影響を見過ごすことはできない。しかしながら、このポリティカル・エコロジー論の弱点もまた早くから指摘されてきた。人々の環境資源利用の変化による影響の過大評価や、逆に自然環境の自然的遷移過程に対する配慮の欠如、さらには環境に与える人為的影響の不確実性や多様性に対する過小評価などである。

本論文は、1990年に独立を迎え、自然利用においても著しい変化を遂げつつあるナミビアのオヴァンボ社会における、社会変容と自然環境の変化との相互関係を、ポリティカル・エコロジー論的視点を基礎にしながらもその弱点を補強する形で動態的に追究した優れた研究成果である。

独立後ポスト・アパルトヘイト体制へ移行したオヴァンボ社会では、土地利用を中心に様々な変化が見られた。オヴァンボ社会では、「伝統的政府」の管理する自然利用権利のもと、フロンティア(周辺地域)の資源に支えられつつ天水依存農耕と季節的な移牧を組み合わせた自給的農牧業を営んできた。

ところが、独立後から一部富裕層世帯によってフロンティアにおける私設放牧地(キャトルポスト)の設置が進展し、さらに「伝統的政府」による管理権限の変化などが相俟って、人々の土地や樹木利用が変化してきた。低木層にアカシアが優占し、中・高木層にドゥームヤシとマルーラ(ウルシ科、*Sclerocarya birrea*)という在来果樹が優占するこの地域の植生は、「伝統的政府」による在来果樹の用益権の管理と住民による樹木への選択的かつ保育的な働きかけで形成されてきたものであることを、詳細な聞き取り調査、GPSを用いた土地利用調査および土壌調査からまず明らかにした。そして、ドゥームヤシやマルーラは果実の利用のみならず、複数の部位が建材や酒作りの材料など多様な用途に用いられ、オヴァンボ社会において重要な樹木であることも綿密な調査で明らかにした。

その上で、このような在来果樹の多目的利用が、フロンティアの変化や村内の共用地の減少により変化してきた過程を詳細に解析した。その結果、一部富裕層によるフロンティアでのキャトルポストの設置とそこにおける牧畜・農耕地の拡大、さらに村内の共用地の減少が、建材として重要なモパネ利用に差別化を生み、酒の原料として重要なマルーラの収穫にも変化をもたらしていること等を明らかにした。

しかしながら、農業生産や牧畜における自給的性格がなくなったわけではなく、またマルーラの酒の贈与に象徴される相互扶助関係（現地で呼ばれている「首の骨」の関係）が存続していて、それが樹木利用にみられる多重化をさらに活性化させていることも明らかにした。また植生への働きかけにみられる世帯差を調査し、低所得者層の脆弱性の増大が単純に植生への負荷の増大を導いていないことを示した。さらに本研究は、自然資源の利用が人為植生の形成メカニズムや植生更新に与える影響についても吟味し、現在のオヴァンボの植生に見られる選択的人為植生の生成過程を明らかにした。

このように本研究は、従来の多くの研究で別個に議論されてきた「社会」と「自然」を有機的に結合させることに成功し、オヴァンボ社会とそれを取り巻く自然を多面的に捉えること成功している。本論文は、申請者が長期に及ぶ聴き取り調査や参与観察で収集した社会調査関係のデータに加え、植生調査や土壌調査などの自然科学的調査から得られた膨大なデータを基礎に分析されたものである。問題設定も的確であり、社会と自然の両面から統合的にアプローチした研究成果として、今後の地域研究のあり方にも少なからず影響をもたらすものとする。

以上のように、申請者の本論文は、本研究科にふさわしい内容を備えた優秀な研究成果であるとして判断される。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 21 年 1 月 23 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：                      年                      月                      日以降